

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March, 2018
No.

54



いのちを守り希望を繋ぐ、新たな融合研究の拠点

関東学院大学「防災・減災・復興学研究所」が始動。

関東学院大学は、自然科学や工学の領域において取り組んできた「防災」のアプローチに加え、人文・社会科学の領域を融合させて学際的に研究する「防災・減災・復興学研究所」を発足しました。規矩大義学長自ら代表を務めるこの研究所では、新たな「防災・減災・復興学」の構築と提唱を目指し、研究成果を発信。近隣自治体をはじめとした地域・社会とも共有し、さらには教育へと繋げていきます。また、この活動を大学の新たなブランディング事業に位置付けると共に、研究力や発信力の強化、海外展開を推進します。そこで本事業の意義や戦略、そして、あるべき防災の姿について規矩大義学長に伺いました。

人や社会の幸福に繋がる 防災・減災・復興学を提唱

関東学院大学は「防災・減災・復興学研究所」を昨年12月1日に発足させました。人と社会の希望や幸福に目を向け、工学的解決だけでなく、人文・社会科学領域を融合させた新たな「防災・減災・復興学」の構築と提唱を実践していきます。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災の後、我が国の「防災」に対する意識に微妙な変化が生じました。土木・建築分野を中心とするハード面だけの防災には限界があるのではないかと懸念が示されたのです。確かに事前準備や避難経路の整備、防災意識の啓発といったソフト面の対策を講じることは非常に重要です。その反面、防災の研究者や行政がハードによる対策を断念し、ソフト事業に期待を寄せることは、ある種の逃げ口上にも受け取れ、決し

て好ましい傾向ではないと考えます。もちろん、ハードとソフトを組み合わせた多重構造の防災施策が必要なのですが、それらの相互補完的な効果を正しく評価する仕組み自体、現時点では十分に確立されていないのです。

一方、ここに来て使われ始めたのが「減災」という言葉です。被害が出ることを前提に、事前の施策や備えにより、被害を少しでも減じようという考えです。ただ、これも本気で減災を考えるならば、想定される被害を的確に定量化し、どんな施策によつてどこまで減じられるかを客観的に証明しなければ、「何もしないよりは被害を減らせた」という口実に過ぎません。防災技術の向上に加え、今まで以上に精緻な予測技術の開発が急がれます。

また、被災地や被災者が「復興」に向けて立ち上がるためには、未来に繋がる希望を持つことが大切です。都市機能やハード

幅広い領域の知見を動員し、新しい学問としての「防災・減災・復興学」の提唱を行うのが本研究の事業です。以前のプロジェクトチームにはなかった教育学・栄養学・看護学といった分野も、間違いなく重要な要素となるでしょう。

関東学院大学には、私自身の専門領域である土木・建築など工学的視野に立つ防災の研究者もいれば、地方行政や地域コミュニティなど人文科学・社会科学の視点から防災を扱う研究者もいます。また、防災を直接標榜しない領域でも、防災に関わるヒントや視点を持つ研究者は大勢います。そこで本事業では、研究者個々の研究テーマ

面の復興を急ぐあまり、人々の絆や地域の文化が失われたり、新たな経済的負担を背負うことにより結果的に未来が減じてしまふといったことは起こってはならないので

をより深く掘り下げていくことはもちろんのこと、「リサーチアドミニストレーター（URA）」という専門人材を置き、研究者同士をマッチングさせ、防災・減災・復興というキーワードのもとに横軸で繋ぐ活動を行い、新たな融合研究のプラットフォームを形成します。そして、シンポジウムや講演会等で研究成果をコンスタントに発表していきます。

建学の精神に基づく活動で ブランディング戦略を推進

関東学院大学は校訓「人になれ奉仕せ



▲「防災・減災・復興学研究所」事業イメージ

よ」の教えに基づき、人や社会の幸せを追求し、社会の持続的発展に寄与するための教育・研究を実践しています。その意味で、防災は非常に関東学院大学らしい研究分野だと言えるでしょう。本研究所でも実践神学などキリスト教の価値観を、工学や都市社会学を研究する上での重要な構成要素と捉えています。

人の「いのち」と「希望」を守ることに着目した全学的な防災研究は、総合大学としての強みと建学の精神に合致した、関東学院大学ならではの取り組みであり、文部科学省の「平成29年度私立大学研究ブランディング事業」に神奈川県に本部を置く大学で唯一選定されました。永続的な研究を行い、太い柱へと成長させることを見据え、平成31年度には「防災・減災・復興学センター」へと発展させたいと考えています。将来的には教育に展開し、サービスラーニング科目や副専攻制度の開設、社会人向けの講座の開講等を行うと共に、近隣の自治体や地域、企業、さらに海外との協働も推進します。昨年末には韓国のカトリック関東大学校災害安全研究センターとの間で学術交流協定を締結し、今後はベトナムの大学との連携も図ります。

自身、産官学を経験し、様々な立場から社会のニーズを見つめてきました。関東学院大学が、真に人や社会の幸福に繋がる防災・減災・復興学を実現し、永続的な教育・研究拠点となることで、大学のブランディング、即ち社会との約束を確立するために、プロジェクトリーダーとして全学を牽引していきたいと思っています。



関東学院大学 学長

規矩 大義

九州工業大学大学院工学研究科設計生産工学専攻博士後期課程修了。横浜国立大学助手を経て、官民の防災研究の職場を経験。2002年関東学院大学工学部着任。2013年12月本学学長就任。2017年12月再任（2期目）。



関東学院大学 経営学部経営学科 学科長
V-BIZ 担当

渡辺 竜介

中央大学大学院商学研究科博士後期課程を満期退学。
関東短期大学、諏訪東京理科大学経営情報学部を経て、
2009年関東学院大学経済学部に着任。
2017年より経営学部経営学科学科長に就任。
専門は財務会計。

関東学院大学が 日本企業の協力を得て ハノイ貿易大学で 教育プログラムを開講。

学術交流協定を結ぶベトナムのハノイ貿易大学が
新たに開設した「日本式国際ビジネス学士課程」に、
関東学院大学が教育プログラムを提供します。その概要を
経営学部経営学科長の渡辺竜介教授にお聞きしました。

日越のビジネスを担う人材を 育成する「V-BIZ」

関東学院大学は、ベトナムのハノイ貿易
大学が昨年9月に開設した「日本式国際ビ
ジネス学士課程」に、現地の学生向けにカ
スタマイズした教育プログラムを提供しま
す。本学の経営学部における「ビジネス
ラン」のカリキュラムと、企業と連携して
学生を育てる「K-biz」に注目したハノ
イ貿易大学の要請を受け、ベトナムに法人
や現地支社を持つ日本企業と協力して準備
を進めてきました。教員を派遣して、この
4月から本格的に始動します。

提供するカリキュラムは、ハノイ貿易大
学の科目とも連動しつつ、年次により「ビ
ジネスプランⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と発展させていき
ます。基礎知識のインプットから始まり、
企業から提示された課題に対するグルー
プワーク、最終的には高度なビジネスプラン

の企画や提案に挑んでいく
予定です。また、現時点で
決まっている7企業の協力
により、ゲスト講師による
講義や、企業・工場見学、
インターンシップなどを行
い、実際のビジネスの視点
を取り入れたベトナム版の
実践教育「V-BIZ」を展
開していきます。

ベトナムの大学の授業は
座学中心で、この学士課程
にもゼミナールがないた
め、授業の枠内でグルー
プワークの訓練から行
う必要があるなど、カリ
キュラム作成にあたって
は工夫を要しましたが、ベ
トナムの学生には新鮮かつ有意義な内容となる
はずです。また、企業にとつては、優秀な
人材の発掘や、ベトナムの学生ならではの
視点を知る機会にもなると考えています。

本学にとつても新たな挑戦ですが、軌道
に乗ったら、両国の学生の交流なども図つ
ていきたいですね。優れたプランを作成し
たグループを、本学経営学部の発表会やコ
ンペに招待するなど、K-b
izとV-BIZの連携も面
白いかも知れません。将来的
にはキャンパスの多様性の推
進、ベトナムの優秀な学生の
編入学や、日本からベトナム
への留学に繋げたいという思
いもあります。様々な可能性
を視野に入れ、キャンパスの
グローバル化の一翼を担え
ばと思います。



◀VJCC 開校セレモニー写真

ハノイ貿易大学

首都ハノイに所在する文系総合大学。1960年に創立されたベトナム最
難関大学の一つで、教育の質も高く、官民に多くのリーダーを輩出してい
ます。1970年代前半から日本語教育に取り組み、2006年には日本語・
日本文化コースを開設。2016年に関東学院大学と学術交流協定を締
結。2017年9月に日本型のビジネスを、知識、スキル、振る舞い、文
化などの視点から学び、ビジネスの現場で活躍できる人材の育成を目的
とする「日本式国際ビジネス学士課程」を開設。第1期生は定員50名に
対して150名の応募があり、英語力を重視した71名を選考し、少数精
鋭の教育を行っています。



関東学院大学 経営学部 学部長

辻 聖二

九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。
1995年関東学院大学経済学部に着任。
関東学院大学キャリアセンター長、
入試センター長、
経済学部経営学科長等を歴任。
2017年4月より経営学部学部長に就任。

ビジネスの視点から 地域や社会に貢献する プロジェクト教育の さらなる充実へ。

経済学部経営学科を改組し、経営学部が創設されて1年。
社会連携教育プラットフォーム「K-biz」を軸に、
現在進められているプロジェクトや、今後の展望について
学部長である辻聖二教授に伺いました。

より高次で継続的な 企業との連携を構築

経営学部では、1年生の段階から「ビ
ジネスプラン」の作成に必要な理論やノウ
ハウを学ぶと共に、少人数のグルー
プワーク形式で実際にプランの考案と発表を行いま
す。グループワークの授業では指導教員を
ローテーションさせることで、様々な専門
的な視点からアドバイスできるよう配慮し
ています。

私は経営財務が専門ですが、経営学部
にはマーケティングや戦略などの経営学領域
はもちろん、スポーツや言語など、様々な
専門性を持つ教員がいます。ビジネスプラ
ンを作成するには、幅広い知識の融合が必
要なので、指導する教員側も、この1年は
専門分野の枠を超えて学ぶべきことが非常
に多くありました。経営学部では、学生と
企業と教員が共に学び合うというコンセ



▼三浦半島の魅力を発信する「K-biz マルシェ」

企業と共に実社会での課題解決に取り組
んでいます。その核となるのが、東証一部
上場企業や地元企業10社で構築する社会連
携教育プラットフォーム「K-biz」で
す。企業との連携は他の大学でも行われて
いますが、K-bizの場合はサポーター
企業を10社に限定することで、長いスパン
で密接な関係を築き、一過性ではなく、プ
ロジェクトを継続・発展していくことが可
能です。例えば京急電鉄や京急百貨店と連
携した「K-biz マルシェ」は、三浦半
島の農園や漁港から、学生自ら野菜や海産
物を仕入れて販売する地域振興プロジェク
ト。2016年から既に4回開催し、その
都度、規模や内容を拡大しています。

こうした継続的な取り組みに加え、新規
のプロジェクトもどんどん誕生していま
す。その一つが「デビットカード・プロ
ジェクト」です。海外に比べ、日本では保
有率が低いデビットカードを、いかに普及

トを掲げてい
ますが、従来
に比べると、
学生との対話
がより活発に
なったと感じ
ています。

身につけた
基本知識と実
践力を土台に、
2年生の秋か
らは少人数制
による「専門ゼ
ミナール」が始
まり、仲間や

させ、利用に繋げるか。三菱東京UFJ銀
行から提示された課題に、学生が取り組
みます。地元で展開するスーパーマーケッ
にもご協力いただき、ヒアリング調査を行
いながら、プロモーション方法を提案して
いきます。

中外製薬や毎日新聞社と連携した「み
らくるプロジェクト」は、障がい者スポー
ツの魅力を紹介して、支援や理解を促す、社
会貢献色の強いプロジェクトです。学生は
運営や企画のスタッフとして、横浜近辺や
都内でイベントを随時開催し、共生社会の
実現を目指しています。

他にも様々なプロジェクトが進行中
ですが、企業や地域からの期待も年々高ま
り、多様な業態に挑戦できることは大き
な強みです。次年度からはゼミの枠にこ
だわらず、オープン参加型のプロジェク
トも実施したいと考えています。他学部
との連携や、異業種コラボレーションも
活性化させ、経営の視点から人をまとめ
るマネジメント能力やリーダーシップ養成
の機会を広げるなど、今後も学生達の創
造的な活動を支える環境を充実させてい
きます。

K-biz サポーター企業

アーバン・コーポレーション株式
会社/株式会社KADOKAWA/
京浜急行電鉄株式会社/中外製
薬株式会社/株式会社野毛印刷
社/株式会社博報堂/株式会社
毎日新聞社/株式会社三菱東京
UFJ銀行/株式会社モスフード
サービス/相鉄ホテル株式会社
〈横浜ベイシェラトン〉(2017年
12月現在)

V-BIZ 協力企業

イオン株式会社/株式会社エイチ・アイ・エス/花王株式会社
/東京ガス株式会社/日本航空株式会社/パナソニック株式
会社/本田技研工業株式会社 (2017年12月現在)



FTU 集合写真▲

建築系大学住宅課題優秀作品展「第17回住宅課題賞」 建築・環境学部が、最優秀賞を受賞。

昨年11月25日に竹中工務店東京本店「ギャラリーエークワッド」(東京都江東区)で開催された第17回「住宅課題賞2017」公開審査会で、関東学院大学建築・環境学部の菅野楓さん(3年)が優秀賞1等を受賞しました。関東学院大学にとっては初めての受賞です。菅野さんは「都市／住宅」という立地から、若い男性2人が空間を分け合って住む都市住宅を設計。黄金町という街の持つ複雑な歴史や環境を読み取り、この場所でしか成立しない、新しい建築のカタチを提案しました。そこで受賞者である菅野さんご本人と、指導教員である粕谷淳司専任講師に、作品の特長や制作過程、評価のポイントについてお聞きしました。

2人の住人が空間を分け合う 都市に住むことの本質を表現

「住宅課題賞」は東京建築士会が2001年から毎年開催している設計コンペティションです。建築の学部や学科を持つ首都圏の37大学48学科が、授業で制作した住宅課題の作品から1点ずつ代表作品として出展。公開審査により「優秀賞」3作品(1等・3等)と「審査員賞」5作品が選出されます。

「実は前回、代表に選ばれた先輩の作品を見るために、審査会場に足を運びました。その時から楽しそうだな、来年は自分が出たいなと思っていました。だから学内の代表に選ばれた時は本当に嬉しかったです」

菅野楓さんは現在、建築・環境学部の「すまいデザインコース」で学んでいます。今回、授業の設計課題として教員から提示されたのは「都市／住宅」という漠とし

関東学院大学 建築・環境学部 3年 菅野 楓 さん



きました。実はそれらはかつての違法な店舗の痕跡だったりするので、そうした独特の雰囲気も取り入れたいなと思いました」

完成した作品は、2人の住人が柔らかな曲線によって居住空間を分け合う、独創的かつ複雑な都市住宅。別々の玄関から入り、同じ建物で生活する2人が唯一出会えるのは最上階のペントハウスのみ。自分以外の人の住まい方に影響され、また影響を与える居住空間は、混沌とした黄金町だからこそ実現できる建築です。

たテーマと、「黄金町」という複雑なコンテクストを持つ立地環境でした。菅野さんはまず、黄金町の街の歴史を調べると共に、実際に何度も歩き回り、カフェに入って話を聞くなどして徹底的にリサーチしたそうです。

「黄金町で若い男性2人がどういう住まい方をするのかということを考えて、発想を広げてきました。互いの居住スペースを、単に階層で分けるのではなく、建物全体をうまく分け合うような住まい方ができたらいいなと考えました」



▲表彰式でクリスタルトロフィを授与され
インタビューに臨む菅野楓さん

「短い審査時間では理解されにくい作品なのかと心配でしたが、審査員の方々が見た瞬間に『ああ、いいね』と乗り気になってくれて。こちらが説明する前からいろいろ質問してくれて嬉しかったです」

審査員の巡回による一次審査、続く二次審査も順調に通過。最終審査では5人の審査員中2人から最高点(5点)を獲得するなど高い評価を受け、見事に全48作品の頂点に立ちました。今回の受賞は大きな自信に繋がったと言う菅野さん。将来志している住宅設計だけでなく、様々なスケールの設計にチャレンジしていきたいそうです。この経験を生かして、さらなる飛躍に期待しています。



関東学院大学 建築・環境学部 専任講師 粕谷 淳司

東京大学工学部建築学科卒業。
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了。
現在、カスヤアーキテクトツォフィスを主宰。
2013年より関東学院大学専任講師を務める。
JIA(日本建築家協会)・
東京建築士会・日本建築学会会員

な感覚をも、うまくこの垂直な建物の中に表現しています。

指導者としては、学生に対して出題した以上、「きつとこんな作品が出てくるのではないか」というある程度の予想があるわけですが、この作品はそうした予想を超えていました。逆にこの作品が僕らに対して何かを問いかけてくる、そんな迫力を持った作品が出てきたことは嬉しい限りです。

菅野さんには「作品的には必ず上位入賞できると思うので、あとは理解してもらえるかどうか」と伝えていました。今回、彼女はあえて「より複雑に、より豊かに」という表現にチャレンジして、労力を惜しまず、過去に例のない都市住宅を提案しました。そうした人知れぬ努力の積み重ねは必ず作品に表れるものであり、審査員にもそれが伝わったのだと思います。



▲受賞作品「2戸の都市住宅」
「都市／住宅」という課題で、横浜市中区黄金町に提案した都市住宅の作品。
柔らかな曲線は2人を隔てる壁ではなく、自分という存在が、
自分以外の存在や環境によって形作られていることを表しています。

関東学院六浦中学校・高等学校出身の文化人類学者

京都大学名誉教授・清水展氏が「日本学士院賞」受賞。

関東学院六浦小学校および中学校・高等学校の卒業生で、京都大学名誉教授・関西大学特任教授である清水展（ひろむ）氏が、昨年「第107回日本学士院賞」を受賞されました。学術上特にすぐれた論文、著書等の研究業績に対して、日本学士院が授与するこの賞は、1911年創設という長い歴史を持つ、非常に権威ある賞です。

清水氏は長年フィリピンでフィールドワークを行っている文化人類学者で、著書『草の根グローバリゼーション―世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』（京都大学学術出版会）が高く評価され、今回の受賞となりました。そこで清水氏に、関東学院での思い出や、ご自身の研究、受賞の喜びについてお聞きしました。

大きな影響を受けた 関東学院での日々

私が生まれ育った家は、横須賀の谷戸と呼ばれる、細い谷の入り組んだ地区のどん

詰まりにありました。当時ここは戦後の引揚者が暮らす2階建ての長屋があり、帰る田舎もなく頼る親戚もいない人達が、生活保護を受けたり、ニコヨンやシッタイ（失業対策）と呼ばれる日雇いの労働をしたり、



文化人類学者 京都大学名誉教授

清水 展（しみず・ひろむ）氏

1951年神奈川県横須賀市生まれ。
関東学院大学六浦中学校・高等学校卒業、東京大学教養学部卒業、同大学大学院社会科学研究科修士課程修了後、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員。1979年東京大学助手、1985年から九州大学助教授、教授を経て、2006年より京都大学東南アジア研究所教授。2017年『草の根グローバリゼーション―世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』で第107回日本学士院賞受賞。

米兵相手に違法な商売をして暮らす、荒んだ場所でした。小学校に上がる前のことですが、幼稚園の先生がわざわざ自宅まで来て、「清水くんは勉強ができるし、地元の学校ではなく、関東学院に行ったらどうか」と両親に勧めてくれました。その時は父親の判断で地元の小学校に入ったのですが、2年生に上がる前に再び、その先生が来て「関東学院が編入学の募集をしているから」と熱心に説得してくれたんです。そのおかげで、小2から高校卒業まで関東学院で過ごしました。

礼拝で讃美歌を歌ったり、聖書を読んだり、子ども心にもこんなに違う世界があるのかと思いましたね。「人になれ 奉仕せよ」という坂田祐先生の言葉は、最も根本的な価値観、社会との関わり方を私に教えてくれました。正直言って、その頃はよくわからなかったですけど、今になって本当にそう思います。貧困と暴力が日常だった引



▲平成29年6月12日に行われた授賞式での記念写真。
清水氏を含め、9件10名が受賞した

生涯の研究対象である フィリピンとの出会い

東京大学の大学院生だった1977年から、フィリピン・ルソン島西部のピナトゥポ山麓にある、電気もガスも水道もない村で20か月暮らし、ネグリート系先住民アエタ族の調査を行いました。以来、40年以上にわたって、フィリピンの調査研究に携わっています。1991年6月にピナトゥポ山が20世紀最大級の大噴火を起こした時、私はちょうど研究のために1年間マニラに滞在していました。現地に飛び、被災したアエタ族の友人と難民キャンプで再会し、その後10か月にわたって災害緊急支援や生活再建支援をするNGOでボランティアワーカーとして働きました。私は技術者でも医療人でもないで、もっぱら国内や海外から来たジャーナリストや支援者達に、アエタ族の価値観や噴火前の生活や世界観を説明しました。言ってみれば、文化の翻訳です。その時は調査研究をせずに友人としてただ寄り添い、彼らの話を聞いていたのですが、あとから思えば、「人になれ 奉仕せよ」という坂田祐先生の教えが無意識のどこかにあったのでしょう。

第107回日本学士院賞を受賞した著書『草の根グローバリゼーション』は、フィ

リピン・ルソン島北部の先住民イフガオのハバオ村で、1998年から短期ずつですが毎年繰り返し、15年にわたるフィールドワークの研究成果をまとめたものです。イフガオの人達は棚田耕作をしていて、その美しい棚田はユネスコ世界遺産に登録されています。また、ここは太平洋戦争末期に、日本軍の総司令官・山下奉文将軍が率いる主力部隊が立てこもり、降伏するまで3か月にわたって戦いを繰り返した、日本と縁の深い土地でもあります。

この村を研究対象にしたきっかけは、旧知の間柄であるフィリピン人映画監督のキッドラット・タヒミックが、村の長老のロペス・ナウヤックと友人だったことです。その長老は、棚田を保全して環境を守るため、そして地場産業としての木彫りの材料を確保するために、村人をまとめ上げて、植林運動を始めようとしていました。私はこの村に非常に興味を持ち、日本とフィリピンのNGOを結びつけるなど、植林運動の積極的な支援に動くと共に、冷戦が終結してグローバル化が急速に進む現代社会の一端を、この山奥の村で暮らす人々の生活を通して身近に観察しました。

▼ハバオ村でキッドラットと
新年を祝う（2016年1月1日）



中、170人以上が海外に出稼ぎに行っています。自らの伝統や文化、生活を守るために、辺境の村人達はグローバル化の波に飛び込み、強かに生きています。言い換えれば、グローバル化はそれほど凄まじい力で、世界の隅々にまで影響を及ぼしているのです。当然日本も例外ではなく、現代社会が等しく直面する問題が、この個別具体的な現場だからこそ際立つと言えます。

▼授賞式当日、研究展示ブースの前にて



草の根の活動が評価され 日本学士院賞を受賞

日本学士院賞受賞の連絡をいただいたのは昨年3月です。この賞は明治末期に始まり、東京・上野公園にある日本学士院会館で行われる授賞式には、天皇皇后両陛下がお出ましになられるなど、とても名誉ある賞です。6月の授賞式の午後には皇居にお招きいただき、両陛下、皇太子殿下、秋篠宮両殿下、宮内庁長官らと午餐会を一緒にさせていただきました。また、夜には文部

科学大臣主催の晩餐会が帝国ホテルで行われました。両陛下とお会いした際には、フィリピンを訪問された時の思い出などを皇后陛下がお話しくださ

いました。

受賞者の多くは理系の研究者ですが、今回、フィールドワークという文化人類学の手法と成果を評価していただいたことは、先人の方々が築き上げてきた地道な研究の蓄積を基盤とする「フィールドの学」の一つの到達点としての評価でもあります。大変嬉しく思います。

私は「フィールドワークは知的総合格闘技だ」と話すことがあります。自ら現地に赴き、生身の人間と接し、知性・感性・想像力・気力・体力を総動員して対象を理解する研究方法であり、そこには鈍感さと繊細さが両方必要です。あまり敏感ですと、心が通じないようなもどかしさを感じるかもしれません。しかし、生身の人間同士が顔を合わせて会話をし、それまで思いもよらなかった価値観や世界の見方を学ぶ愚直なフィールドワークは、西欧的な社会科学のスタイルとは全く異なり、私を新しい世界へと導いてくれます。そこが文化人類学の面白さですね。

関東学院六浦中学校・高等学校

60年間の調査結果を通して、平潟湾の存在価値と保護をアピール 生物部が「第8回アジア湿地シンポジウム」に参加。

昨年11月7日から11日まで佐賀市で開催された「第8回アジア湿地シンポジウム」では、20以上の国や地域から、学者や環境団体、学生が参加し、湿地に関する研究報告や意見交換が行われました。このシンポジウムに、関東学院六浦中学校・高等学校の生物部の中学生1名と高校生2名が3日間参加。東京湾に残された干潟「平潟湾」の存在価値をアピールしました。貴重な経験について生物部顧問の依田聡子教諭と生徒達に伺いました。

英語でのポスターセッションと 討論会に中高生が挑戦

かつて浮世絵に描かれるほど風光明媚だった平潟湾は、高度経済成長期にはヘドロの海と化すほど汚染が深刻化。現在は水質改善が進み、多様な生物が生息していますが、少し掘れば古いヘドロが出てきます。生物部では60年間にわたって、平潟湾で生物や野鳥の観察を実施。今回、3人の生徒が「アジア湿地シンポジウム」のポスターセッションや討論会に参加しました。

「平潟湾は、『最悪の環境汚染があっても復活することができ。しかし完全に回復することは難しい』という、二つの面を示してくれる貴重な干潟です。生徒達は、都会の中に残る、この小さな干潟の価値を、長年の調査結果と共に訴えました」（依田教諭）

討論会に参加した高校2年生の本田野亜さんは、他の日本人学生の多くが日本語で発言する中、シンポジウムでの公用語と定められている英語で堂々と意見を述べ

ました。

「僕が主張したのは、渡り鳥にとって越冬地であり、中継地点でもある湿地の重要性です。鳥は国境を越えて移動するので、世界規模で保全に努めることが大切だと訴えました。海外の学生からは、湿地を守ろうという強い意志が伝わり刺激を受けました」（本田さん）

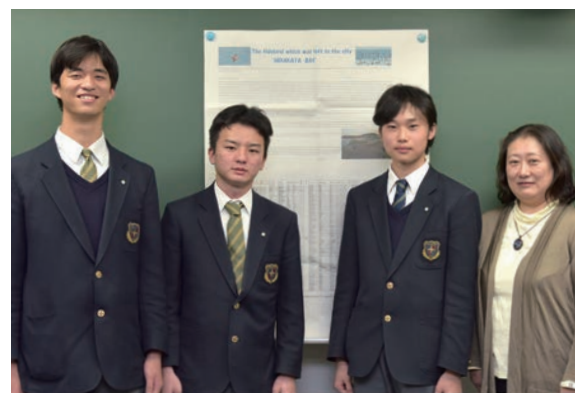
ポスターセッションで活躍したのは、高校2年生の江副巧真さんと、中学3年生の中山心さんです。

「平潟湾が汚染からどう回復してきたか、そして様々な国から野鳥が飛来していることを伝えました。英語でうまく質疑応答できた時は嬉しかったですね。発展途上国と先進国では考え方も違うし、いろんな国や地域の人と意見交換できました」（江

副さん）

「平潟湾の存在を知らない人が多いので、その説明や、汚染から立ち直りつつあることを伝えました。僕達とは異なる方法で湿地を研究している学校もあり、これから部活を支えていく人間になるためにも、参考にしていきたいと思います」（中山さん）

▼ポスターセッションにて



▲左から本田さん、江副さん、中山さん、依田教諭

今後こうした機会があれば参加したいと力強く語る3人。依田教諭もその成長を実感しています。

「多様な表現や考え方に触れ、世界のレベルを知ったことは、大きな発見だったと思います。今回の経験を生かし、さらなるチャレンジに繋がってほしいですね」



▲討論会
挙手して英語で発言している
本田さん

関東学院六浦小学校

子どもの目と耳とペンによる、学校生活の記録や、自己表現の活動 受け継がれる、新聞作りの教育と精神。

子ども達の主体的な活動を大切に、授業や委員会活動の中で継承されてきた、関東学院六浦小学校の新聞作り。

学校新聞「こどもかんらん」は、創刊以来60年以上にわたって、時代時代の子どもの感性で

学校の出来事を記録した、六浦小学校の歴史であり教育成果の証しです。

その伝統と精神を守りながら、新たな歴史を刻み続ける新聞作りについて、教務主任である長谷川綾子教諭に伺いました。

主体性や表現力を育む 新聞作りによる人格教育

本校では授業や委員会活動を通じて、日常的に新聞作りを教育に取り入れています。その一つは、新聞委員会による学校新聞「こどもかんらん」の製作です。1956（昭和31）年5月22日創刊の第1号から、昨年末まで617号を教え、子どもの目線

で学校の歩みを伝えてくれる、大変貴重な資料です。



▲1956年5月22日創刊「こどもかんらん」第1号

本校の新聞教育の礎を築かれた原正先生は、毎年夏休みに神奈川県や東京、千葉の私立小学校の児童が集まっ

て3泊4日で開催される「学校新聞まめ記者講習会」の創設者でもあります。私に本校に着任して2年後に原先生は退職されましたが、新聞を書く上で、原先生が子ども達に常々おっしゃっていたのは、必ず自分の足で取材をしないといけないことです。「教室の中にいるだけでは新聞は書けないよ」「取材に行ったら、きちんと挨拶から始めなさい」と、マナーも含めて熱心にご指導されて、私も多くのことを学ばせていただきました。

新聞委員の活動で象徴的なのが、5月の運動会当日に発行する特集号です。新聞委員の子ども達は、競技の合間を縫って、種目ごとの結果、児童や保護者へのインタビュー、人気投票など、取材に駆け回り、ペンを走らせ、印刷をして、運動会終了直後に保護者の方々に配布します。大変な作業ですが、達成感が大きく、多くの方々に読んでいただくことが子ども達の励みにもなっています。

▼運動会特集は、事前に2回、当日の朝・夕、計4号発行



授業での新聞作りも、全学的に取り組んでいます。例えば社会科学見学での体験を新聞にまとめるなど、様々な教科で実施し、作った新聞は必ず掲示します。「面白い記事だな」「字が読みやすいな」など、友達が書いた新聞を見ることも良い勉強になります。年次が進むにつれて、見出しの付け方やレイアウトを工夫したり、高学年では仲



関東学院六浦小学校 教務主任
長谷川 綾子

間と協力してグループ新聞にも取り組むなど、ステップアップしながら深い学びへと繋がっています。

新聞作りは、自ら題材を見つける探求心、取材でのコミュニケーション力、文章を要約する力、相手に伝わる表現力など、幅広い能力を伸ばす総合学習です。長年にわたって築き上げられた、そのイズムと活動を、今後も絶やさずに続けていきたいと思っています。

関東学院六浦こども園

父親同士が力を合わせ、園庭を進化させていく

子ども達の成長を支える「お父さんの会」の活動。

関東学院六浦こども園の園庭は、豊かな自然の中、手作りの遊具で夢中になって遊び込める冒険の場。子ども自身が主体的に挑戦できる環境作りに大きく貢献しているのが「お父さんの会」です。お父さん達の自主的な活動により、より良い園庭を作るためのワークショップ、そしてバーベキューや流しそうめんなどの季節行事を実施しています。その活動について根津美英子園長や参加者の皆さんにお話を伺いました。

園庭作りにイベントに
お父さん達が大活躍

お父さんの会は、2013年に新しい園舎で認定こども園として歩み出したのを機に、有志の方々が集まって発足しました。現在の登録者数は80人以上。卒園生のお父さんも多く、月1回の活動で園庭の遊具やビオトープの整備を行っています。

「園庭を設計したのは関東学院大学建築・環境学部の中津秀之准教授です。当初から『この園庭は未完成。子ども達を見ていくのがコンセプト』とおっしゃって、今でもお父さんの会と共に園庭作りに携わってくださっています」(根津園長)

現在園庭にある砂場や山、花壇、見晴台やビザ窯などは、どれもお父さん達による手作りで。活動の一環として全国の先進的な園庭の視察も実施。一昨年は北海道、昨年は山形の園庭を訪問見学しました。ま



▲夏の恒例行事「流しそうめん」

た、お父さんの会は様々なアウトドア企画も実施しています。特に夏の「流しそうめん」には100人以上の親子が集合。大学の図書館裏から竹を伐採することから始まり、手作りで組み立てるレーン是一年長さが延びて、今では30メートル以上に。子ども達が大喜びする名物イベントです。

取材に訪れた日は、子ども達が創作活動を楽しむための「工作小屋」作りと芋煮会を実施。参加者は大工作業、樹木や花壇の世話、遊具のメンテナンス、薪割りや火おこしなど、思い思いに作業をこなし、子ども達も楽しそうに手伝っています。参加者

の声をいくつか紹介します。

「DIYやアウトドアは初心者でしたが、いつの間にかスキルが上がり、今ではチェンソーも使えるようになりました」

「子ども達の僕を見る目が変わったと思います。父親が園庭を作ることは、子どもの目には頼もしく見えるようです」

「子どもが普段どういう場所で生活しているのかを見る機会にもなっています」

「父親同士が交流できる貴重な場。小学校に上がってもお付き合いが続いています」

「どの方も楽しみなが、やり甲斐やメリットを実感しているようです。最後に根津園長に今後の活動について伺いました。

「園庭作りに終わりはありません。来年度は室内でもっと冒険や挑戦ができるような環境を作っていきたいと考えています。親子でのアウトドア企画もますます充実させて、先生達とお父さん達が協力し合いながら、一緒にこども園をより良いものにしていきたいですね」



▲子どもと一緒にアウトドア料理



▲ものづくりで遊べる「工作小屋」を製作中

人気長寿番組「秘密のケンミンSHOW」プロデューサー
多くの人との繋がりに支えられて、今の自分がいます。

「秘密のケンミンSHOW」は、日本各地の知られざる地域性や魅力を掘り起こして紹介する番組です。私は立ち上げ時からプロデューサーとして参加しています。昨年

10月に放送10周年を迎えましたが、正直、こんな長寿番組になるとは思っていませんでした。ご当地ネタには事欠かない日本ですが、それでも無尽蔵に出てくるわけでは

ありません。どんな切り口で情報を発信するか、スタッフ一同、日々格闘しています。

週2回の企画会議で、各地の食文化や風習、町おこしなどのネタをスタッフが持ち寄り、そこで共有した

情報が本当に地域で定着しているのか、現地の方々が多く集まる施設やお店にご協力いただいて、徹底的にリサーチを行います。その後は県民を代表して熱く語っていただける出演者を探したり、ディレクターがロケで撮ってきた素材や編集をチェック。そこまでやって初めてスタジオ収録に臨むことができます。新人からベテランまで、信頼できるスタッフや、各県の皆さんと築いてきたネットワークは大きな財産です

ね。街頭インタビューなどで「いつも観てるよ」と声を掛けていただくと、一生懸命に作ってきて良かったなと思います。

私自身、子どもの頃からテレビが大好きで、高校時代には漠然とテレビ業界に関心を持っていました。実家が自営業で、両親が家で仕事をしている中、ずっと兄や祖母と一緒にテレビを観て育ちました。家族の中心にテレビがあり、情報を得たり、皆で笑ったり。テレビの仕事って面白いなと思ったんですね。

群馬県出身の私が関東学院大学に進んだのは、兄の強い勧めがあったからです。ラグビーが好きで、兄が言うには、「将来はおそらく東京で働くことになるだろうから、大学時代に風土の良い横浜で過ごすのもいいんじゃないかしら」。合格した時、一番喜んでくれたのが兄でした(笑)。文学部英米文学科に在籍しましたが、当時の友人とは今でもよく会います。音楽業界で働きたい、航空業界で働きたいなど、将来のビジョンをはっきり持った友人が多かったですね。そうした友人と会う時はすごく楽しいし、励みにもなります。



▲©ytv「秘密のケンミンSHOW」

卒業と同時にハウフルスに入社し、テレビの仕事に就いて20年余り。決して楽しいことだけではなく、大変なこともありましたが、その先に面白いことがあるのではないかと常に信じて、番組作りに携わってきました。今後も様々な企画を考えて、守るだけでなく、攻めの姿勢で取り組んでいきたいですね。

圧倒的な実力とセンスで、注目されるロックバンド「アレキサンドロス」 自分達の音楽を、世界規模へ広げていきたい。

小5の頃に音楽番組で観たロックバンド「ルナシー」が、音楽やドラムに興味を持った原点です。高校生になって、1学年先輩だったギターのまーくん（白井真輝さん）と出会うきっかけにもなった軽音楽部に入り、ドラムを叩き始めました。それから音楽漬けの毎日。バンドを掛け持ちし過ぎて、文化祭の前には練習スタジオに24時間拘束されて（笑）。バンドが入れ替わり立ち替わり練習する中、ドラムは僕一人、ひたすら叩き続けた思い出があります。

実を言うと、僕は中学時代にいじめられていた時期がありました。でも、音楽を好きになり、ドラムを叩けるようになって、初めて人に必要とされているという実感をすることができた。そういった意味では、音楽が僕の人生を変えたと言えるかもしれないですね。

関東学院大学でも音楽サークルに所属し、授業後は夜まで仲間と練習や馬鹿話に明け暮れていました。学業面では文学部比較文化学科のゼミに所属。70年代のイギリ

スを発端とするプログレッシブ・ロックのムーブメントを題材に卒業論文を書きました。当時は音楽雑誌のライターか、好きな洋服の仕事に就いて、ミュージシャンをサポートしたいというのが僕なりの人生の展望だったんです。でも、大学時代の最後になって音楽事務所の人と繋がりができたことで、迷いが生じて。悩み抜いた末に、土壇場で内定をお断りして、自分自身が音楽の表舞台に立つことを目指す道を選びました。

卒業後は横浜近辺でアルバイトをしながらバンド活動を続けました。転機が訪れたのは2010年。

で自分達がかっこいいと思う音楽を信じて突き進んできました。アレキサンドロスは、様々な音楽の要素を飲み込んで自分達の糧としてきたバンドなので、音楽性の幅がすごく広い。その中にあって、多彩なフレージングや音色使いが、僕のドラムの特徴だと思っています。以前と比べれば、ライブ会場の規模も大きくなったけど、僕らが求めているものもずっとずっと先にある。それは「世界的に売れる」ということ。これからも変わらず、そこに向かって走っていきたいですね。



[Alexandros] ドラマー
庄村 聡泰 さん

3月21日生まれ。福岡県出身。小1の終わりから神奈川県相模原市で育つ。バンドのメンバーである川上洋平と白井真輝は、地元の高校の1年先輩に当たる。関東学院大学文学部比較文化学科卒業。

当時やっていたバンドに行き詰まりを感じて、音楽をやめようかとさえ思い始めていた頃、アレキサンドロスの前任のドラマーが脱退することになり、メンバー達から「一緒にやらないか」と誘われたんです。サポートドラマーとしてツアー参加後に正式加入し、以来4人



▲(左から) 白井真輝、磯部寛之、庄村聡泰、川上洋平

[Alexandros]
アレキサンドロス

海外育ちのボーカルの川上洋平と、ベースの磯部寛之を中心に2007年より本格始動。のちに加入したギターの白井真輝、ドラムの庄村聡泰と共に、幅広い音楽性が高い演奏スキルで国内外から支持を集める。CMやドラマ等とのタイアップ多数。2017年11月に最新シングル「明日、また」、12月には初のミュージッククリップ集「CLIPS」発売。

関東学院の卒業生が経営に関わっているお店を訪ねるコーナー。今回は料理と酒を楽しむ、老舗と新鋭の2店をご紹介します。

関東学院ネットワーク

タツノコ

住所／神奈川県横浜市中区宮川町1-1 2F
☎／070-4300-3121（予約可）
営業時間／月曜定休
[火~土] 17:00~23:30(L.O.23:00)
[日・祝] 17:00~22:30(L.O.22:00)
席数7席(カウンター席のみ)



カウンター席で味わう 本格的な和食と日本酒

横浜のディープな飲み屋街・野毛で、ひととき個性的な飲食店がひしめく都橋商店街。その2階にある「タツノコ」は、カウンターで気軽に本格的な和食と日本酒が味わえるお店です。店主の中屋真人さんは現在36歳。若い頃から独立願望があり、関東学院大学経済学部経営学科を卒業後、割烹や会席料理店で腕を磨き、2016年9月に同店をオープンしました。季節感を大切に、全国各地の海産物や野菜を厳選して調理。「出汁も、割烹と同じような素材を使って丁寧にしています」とこだわりを見せます。取材の時期は鹿児島産マダイや神奈



▲刺身盛り合わせは1人前1200円（時価）

川産ホウボウなど、旬の魚を目の前でさばいてくれる刺身や、素材を活かした料理は、お酒が進むこと請け合い。「最初はハシゴ酒で偶然立ち寄ったお客さんが、再訪してじっくり味わってくれることが多い」というのも納得です。カウンター7席の狭さと、本格和食とのギャップも楽しく、清潔な店内は若者や女性、年配のご夫婦まで安心してくつろげる、おすすめの一軒です。

鳥佳

住所／神奈川県横浜市港南区大久保1-9-23
☎／045-842-5391（予約可）
営業時間／年中無休
16:30～24:00(L.O.23:30)
姉妹店が上大岡3店、金沢文庫1店ある



激戦区上大岡で連日満員 昭和47年創業の老舗焼鳥屋

地元で長年愛される焼鳥屋「鳥佳」。赤暖簾をくぐれば、老若男女が集う大衆酒場の活気が迎えます。「祖母の代から50年近く上大岡で営業しています。昔からの常連さんも、家族で代々いらしてくださっていますね」と語る三代目の八木陽道さんは27歳。父である二代目と共に毎日、炭焼き台の前に立っています。秘伝のタレで焼くレバー（1本160円）は、プリプリとした絶妙の焼き加減。上大岡の伝説の煮込み職人から受け継いだ牛もつ煮込み（500円）と共に、創業以来の名物です。炭焼き料理だけでなく、地元の金沢漁港から毎日運ばれ

る鮮魚や、自ら蔵元に足を運んで仕入れる地酒も自慢です。関東学院六浦中学校・高等学校の卒業生である八木さんは、中学では陸上部、高校では地元のヨットクラブに所属して青春を謳歌。今は同級生もお店に通ってくれます。「地元を盛り上げるためにも、様々なことにチャレンジしたいですね」。人気店なので、訪問前に念のため電話を入れるのが良さそうです。



赤暖簾が目印。入口はどちらからでも大丈夫 ▲

広報から

ICT化やグローバル化の進展による経済構造の急激な変化に加え、少子高齢化に伴う生産人口の減少、近隣諸国との緊張関係、各地を襲う災害の発生など、日本社会の状況は日々変化しています。こうした社会変動の激しい時代を、子どもたちが逞しく豊かに生き抜くために、学校教育の在り方も変化する必要があります。学びの基礎・基本に加え、必要な情報を正しく選択し利活用できる力、民族や人種、文化など、あらゆる多様性を認め他者と共存できる力、自ら課題を見つけ主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する力などを身につけた人材が次の時代に求められています。その要請に応えることのできるよう、関東学院各校では、独自性に富んだ様々な教育方法を展開しています。

関東学院大学では、平成29年度 文部科学省 私立大学研究ブランディング事業への採択を受け、昨年12月に「防災・減災・復興学研究所」を発足させました。学長がリーダーシップを執り、工学的な解決だけに留まらず人文社会的アプローチも融合させた学際的な研究・教育を進めていきます。今後は、新たな学術研究領域を提唱し、行政や復興支援に寄与する成果の発信を行うとともに、人や社会の真の幸福に繋がる防災・減災・復興の持続的発展に取り組んでいきます。関東学院は今後も、地域社会の発展や課題の解決を目指して、教育・研究の向上を進めていきます。引き続き関東学院の挑戦にご期待ください。

関東学院大学 広報課 (045) 786-7049 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

・編集：関東学院大学 広報課 ・写真：藤間 久子、森 日出夫（アマノスタジオ） ・文章：坂尾 基子 ・デザイン：高橋 稔、竹本 真実（株式会社CCN）

お知らせ

関東学院大学 チャペルコンサート

関東学院大学では、金沢八景キャンパス礼拝堂とE5号館3階チャペルでパイプオルガンのコンサートを行っております。皆さまぜひお越しください。(事前予約不要、入場無料)

● 金沢八景キャンパス礼拝堂

開催日：毎週木曜日 17:30～17:50 金曜日 11:40～12:00

● 金沢八景キャンパス E5号館3階チャペル

開催日：4/19(木)、5/10(木)、6/7(木)、7/5(木)、10/4(木)、11/8(木)、12/6(木)
12:25～12:45

※開催日等は、学校行事の都合により変更になる場合があります。

問い合わせ先

関東学院大学宗教教育センター

☎ 045-786-7218

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 礼拝堂1階



金沢八景キャンパス礼拝堂 ▲



金沢八景キャンパス E5号館3階チャペル ▲

